

# 2020年度版「中国」を学ぶみなさんにおすすめの本

中央大学文学部人文社会学科中国言語文化専攻

中国の言葉と文化を学ぶみなさんのために、おもしろくてためになる本をあげてみました。普段の読書やレポートの参考としてぜひ役立ててください。

本の所在も【 】の中に示してありますので、これだと思うものからどんどん借りて読んでください。

中国言語 = 文学部棟 5階中国言語文化研究室  
開架・開架新書・開架文庫 = 中央図書館 4階開架閲覧室  
中央書庫 = 中央図書館 2階カウンター



本の分類：

言語・文字 / 歴史・思想 / 文学 / 現代の中国・香港・台湾 / 今、日中関係を考える / 欧米と中国

言語・文字

## ○安藤彦太郎『中国語と近代日本』（岩波新書 新赤版 12）【中国言語・開架新書・中央書庫】

戦前から戦後にかけて日本人が中国語といかに向き合ってきたかを日中関係の歴史に即して解説しています。中国を異文化の社会としてみる視点がなければ、日本人にとって中国語は、中国への理解を妨げる障壁になりかねません。日中学院で長年院長を務めた経歴を持つ著者の問題意識は、今の日本で中国語を学ぶ私たちにも十分通じるものがあります。（石村）

## ○木村英樹『中国語はじめての一步【新版】』（ちくま学芸文庫）【開架】

中国語とは一体どのような言語なのでしょう？ 本書は発音から文法の特徴まで幅広く解説し、これから学ぶ人だけでなく、ある程度学習が進んだ人にも「なるほど」と思わせてくれます。関西人である著者の軽いノリも楽しく、気軽に手に取ることができます。（榎本）

## ○田部井文雄、江連隆、菅野礼行、土屋泰男『社会人のための漢詩漢文小百科』（大修館書店）【中国言語】※この資料は参考図書（M資料）となるため、配架場所での閲覧のみとなります。ご注意ください。

高校で使う国語便覧の漢文版のような感じです。内容は高校程度のものよりも詳細です。大学の漢文の授業で参考書とされることもよくあります。「小百科」ということで、基本的には何かを調べるための本ではありますが、読み物としても楽しめます。値段もお手頃。（材木谷）

## ○近藤春雄『漢文のよみ方』（武蔵野新書 13）【中国言語】

もしも中国古典文学に興味があるならば、フツウの中国語とは別に、中国語文言文の読解力を養うことが大切です。中国語文言文を読む際、「漢文訓読」の知識が部分的に役立ちます。この本は、説明の多い漢文句法集といった感じ。文のカタチを頭に入れましょう。（材木谷）

○橋本萬太郎編『漢民族と中国社会』（山川出版社）【中国言語・中央書庫】

「漢民族の文化パターンの本質は何か」を共通テーマとし、言語・民族・社会経済・文化生態など多方面から中国社会の構造についてアプローチしています。内容がやや専門的なので、難しいと感じる人には、興味のある分野から読んでみることをお勧めします。きっと深い理解が得られるはずです。（石村）

○岡田英弘『読む年表 中国の歴史』（WAC）【開架】

「中国人や漢族という種族は存在しない」「中国五千年のウソ」など好みは分かれるところですが、著者の中国史観は実に刺激的です。本書を読めば、あなたが抱えている中国のイメージは根底から揺さぶられることでしょう。漢族が語らない中国の裏側（これが真実に近かったりする）を覗くことができる一冊です。（石村）

○白川静『孔子伝』（中公文庫 し-20-4）【開架文庫】

類書はほかにもありますが、ここでは白川静先生の本を紹介します。孔子は葬儀を請け負っていた原始儒教グループ、いわば下層階級の出身だと言われています。葬儀という儀礼の本来の意味を求め、そこから「礼」を基本に据えた人間尊重の思想を発展させていったのです。本書を通じて人間味あふれる孔子の一面を知ってほしいと思います。（石村）

○浅野裕一『儒教 ルサンチマンの宗教』（平凡社新書 007）【中国言語・開架新書】

孔子さまと言えば聖人。しかし、この本を読むとそんな観念が崩壊します。儒教に批判的な立場から書かれた儒教形成史。「観念の崩壊」をきっちり感じるため、孔子や儒教について、百科事典程度の知識を押さえておくといよいでしょう。（材木谷）

○宮崎市定『科挙——中国の試験地獄』（中公文庫 BIBLIO B-6-1）【中国言語・開架文庫】

古い時代の中国は、科挙を抜きには語れません。文学作品を読む場合でも、科挙についての知識が必要だったりします。その科挙を、わかりやすく面白く、詳細に解説するのがこの本。古い時代の中国に興味があるなら必読。（材木谷）

○村松暎『中国列女伝——三千年の歴史のなかで』（中公新書 166）【中国言語・開架新書】

古い時代の中国における男尊女卑の仕組みを分析し、女性がいかに生きたかを考察。文学作品などから多くのエピソードが紹介されることもあり、実に面白く読めます。取り上げられた作品も、きっと読みたくなってしまはず。（材木谷）

○武田泰淳『司馬遷——史記の世界——』（講談社文芸文庫 た-B-4）【開架文庫】

私は学生時代に中国人の歴史観について調べているときに本書と出会いました。歴史を作り、動かしているのは人間です。この当たり前道理を司馬遷は「紀伝体」という新しい手法を使ってダイナミックに把握しようと試みました。少々難しく感じるかもしれませんが、本書を読めば、歴史の解釈は記述する側の視点によって変わりうるということが納得できることでしょう。（石村）

### ○加藤徹『貝と羊の中国人』（新潮新書 169）【開架新書】

多神教的で実利を重んじる殷人は貝の文化と、一神教的で無形の主義を好む周人は羊の文化と深いつながりがあり、中国人（漢民族）の祖型は、この2つの民族集団がぶつかり合ってできたものである、と著者は説きます。平易なことばで書かれていますが、内容はディープです。つかみどころのない中国人の行動原理を理解するのにおすすめの一冊です。（石村）

### ○丸山昇『文化大革命に到る道——思想政策と知識人群像』（岩波書店）【中国言語・中央書庫】

魯迅研究を中心に現代中国文学研究者として知られる著者が、中華人民共和国の建国から文化大革命に到るまでの期間、政治運動に翻弄された知識人たちの波乱の人生を描いた1冊。中国における政治と文学の関係について考える上での必読書であり、同時代の中国を見つめる視座についても示唆に富む著書です。（及川）

### ○馬場公彦『世界史のなかの文化大革命』（平凡社新書 891）【中国言語・開架新書】

この本の著者は、文化大革命を特殊な国における限定的な事件とは見ていません。国際社会との関連性の中で起きた現象、したがっていつでもどこでも再現しかねないことと捉えています。文化大革命が日本をはじめ他国に与えた影響についての詳細な考察も大変興味深いものです。（飯塚）

### ○張博樹著・石井知章、及川淳子、中村達雄訳『新全体主義の思想史 コロンビア大学現代中国講義』（白水社）【中国言語・開架】

1989年天安門事件以降の中国思想地図を壮大なスケールで描いた著作です。難解な専門書ではありますが、著者が中国を離れてアメリカに亡命せざるを得なくなった背景なども描かれており、中国の現代思想研究者の回顧録としても興味深く読むことができます。アメリカ・コロンビア大学の人気講義を元に編集された著書なので、現代思想に関心がある人はぜひチャレンジしてください。（及川）

### ○余傑著、劉燕子編訳『劉曉波伝』（集広社）【中国言語・開架】

2010年ノーベル平和賞を受賞し、2017年に獄死した作家、劉曉波の伝記。1989年の天安門事件を中心に、中国における民主化運動や人権運動の歩みを俯瞰しつつ、劉曉波という人物の思想と行動について知ることができます。中国の言論統制の実情を知ると同時に、思想・言論の自由について、ぜひ考えてみてください。（及川）

## 文学

### ○川合康三編訳『新編 中国名詩選』上中下（岩波文庫）【中国言語・開架文庫・中央小型】

中国古典詩 500首を収める3冊組みの文庫本です。上古から清末までの中国古典詩の概観がつかめます。それぞれの作品に対して訓読文、訳文、注釈、解説があり、作品の理解が深められるようになっています。なお、同じ岩波文庫の古い『中国名詩選』もお薦めです（これは絶版）。（材木谷）

### ○中野美代子『西遊記 XYZ』（講談社選書メチエ）【中国言語・開架】

日本でもよく知られている『西遊記』には数多くの謎が仕掛けられています。孫悟空、猪八戒といった特異なキャラクターが象徴するもの、挿入される大量の詩詞の持つ意味、迷路のような作品構造などについて

て語る本書は、単純な入門書ではなく、ウラ読みの解説書です。だから、ABCではなく、XYZなのでしょう。(飯塚)

### ○巴金（立間祥介訳）『寒い夜』（岩波文庫 赤 28-3）【中国言語・開架文庫・中央小型】

日中戦争の時代の重慶に暮らす庶民の生活を描く、中国現代文学の名作の一つです。出版社の校正係の夫は肺病をわずらい、母親と妻の不仲に悩んでいます。銀行員の妻は仕事に生きがいを見出していますが、家庭を捨てることもできません。インテリの無力さ、嫁姑の対立、女性の自立などのテーマが胸を打ちます。(飯塚)

### ○莫言（井口晃訳）『赤い高粱』（岩波現代文庫 文芸 79）【中国言語・開架文庫】

作者の故郷である山東省高密県を舞台に、「私」の祖父母や両親の歴史が語られる長篇小説です。抗日戦争の時代を生きた庶民の姿が、ときにリアルに、ときに荒唐無稽に描かれます。チャン・イーモウ監督の映画『紅いコーリャン』の原作としても知られる作品です。(飯塚)

### ○余華（飯塚容訳）『活きる』（中公文庫 ヨ 1-1）【中国言語・開架文庫】

国共内戦、土地改革、人民公社、大躍進、そして文化大革命と、中国の波瀾の時代を生き抜いた農民の生涯を描きます。チャン・イーモウ監督によって映画化され、余華はこの作品で一躍名声を得ました。普遍的な家族の絆を描き、国内外で多くの読者から支持されている超ベストセラー小説です。(飯塚)

### ○余華（飯塚容訳）『ほんとうの中国の話しよう』（河出文庫 ヨ-1-1）【中国言語】

『活きる』『兄弟』『死者たちの七日間』などの小説で知られる作家・余華のエッセイ集です。様々な中国の社会問題が、作者自身のエピソードを交えながら語られます。中国の歴史と現状に対する分析は冷静で、しかも鋭いものがあります。日本人が中国の本質を知り、中国人と本音の付き合いをしていくためのヒントを与えてくれるでしょう。(飯塚)

### ○楊逸『時が滲む朝』（文藝春秋）【中国言語・開架】

日本語を母語としない作家として初めて芥川賞を受賞した作品です（2008年上半期）。中国の若者が天安門事件で味わった挫折感や、その後の「金儲け第一」の社会に対する違和感がヴィヴィッドに書かれています。主人公と同世代の私は号泣……日本語で書いてくれた著者に感謝！（榎本）

### ○檜山久雄『魯迅——その文学と闘い』（第三文明社 レグルス文庫 267）【中国言語・開架】

中国現代文学に触れるとき、最初に名前が出てくる作家は魯迅でしょう。本書は、その魯迅の作品や生涯を知るために役立つ参考書です。魯迅がかかわった各種文学論争の部分はやや難しいかもしれませんが、主要な小説や散文を読むためのガイドブックとして、ぜひ活用してください。(飯塚)

### ○藤井省三『村上春樹のなかの中国』（朝日選書 826）【中国言語・開架】

村上春樹と中国のかかわりを多角的に考察した本です。中国語圏のうち、台湾、香港では1980年代、中国では1990年代に、高度経済成長にともなう人間疎外、そして政治の季節（民主化運動）が過ぎ去ったあとの虚脱感が、村上ブームを招来しました。著者は、日中間の歴史の記憶を語る事が重要なテーマのひとつになっていると指摘しています。(飯塚)

### ○及川淳子『11 通の手紙』(小学館)【中国言語・開架・中央書庫】

2010年ノーベル平和賞受賞者の作家、劉曉波との交流をもとに、創作書簡集というスタイルで書いた一冊です。思想、良心、言論、報道、学問、信仰、表現など、様々な「自由」について考えるきっかけになると思います。挿絵のデッサン画も味わい深く、読みやすい小さな本なので、ぜひ手にとって見てください。(自薦ですみません。及川)

## 現代の中国・香港・台湾

### ○藤野彰編著『現代中国を知るための52章 第6版』(明石書店)【中国言語・開架】

政治、経済、社会、外交、日中関係……様々な視点から現代中国について解説した1冊。第1章から読み進めても、関心のある項目をピックアップして読んでも構いません。急速に進む中国のネット状況、環境問題、教育格差、ジェンダーなど、身近なトピックから、いまの中国について理解を深めてください。(及川)

### ○光田剛編『現代中国入門』(ちくま新書 1258)【開架新書】

市民講座「中国を理解する」の講義録をもとに編纂された入門書です。現代中国の歴史、文化、思想、政治、社会などについて、各分野の専門家がわかりやすく解説を加えています。ジャンルごとに「さらに詳しく知るための参考文献」が付されているので、関心に応じてさらに知識を広げることができます。(飯塚)

### ○古畑康雄『習近平時代のネット社会:「壁」と「微」の中国』(勉誠出版)【中国言語】

中国で絶大な影響力をもつSNSの「微信」やスマートフォンを活用した電子決済など、中国のインターネット事情について豊富な事例をもとに解説した1冊。2016年に出版された図書なので、最新事情はさらに変化していますが、中国のネット空間の「自由」と「規制」について考える手がかりになります。(及川)

### ○川島真・小嶋華津子『よくわかる現代中国政治』(ミネルヴァ書房)【中国言語・開架】

タイトルに「政治」と書いてありますが、中国の地理や近現代史をはじめ、政治体制、社会制度、外交、軍事、経済、司法、社会、文化、台湾との関係、香港事情なども網羅的に解説している入門テキストです。見開き1ページで一項目が解説されているので、興味のあるところから読むことができます。(及川)

### ○倉田徹・倉田明子『香港危機の深層 「逃亡犯条例」改正問題と「一国二制度」のゆくえ』(東京外国語大学出版会)【開架】

香港で2019年6月に始まり長期化した抗議デモを中心に、「一国二制度」の歴史と現状、今後の課題、香港の社会や文化、香港と台湾の関係などが多面的に論じられています。香港の若者たちは、なぜデモに参加するのでしょうか。みなさんと同世代の若者が、政治や社会についてどのように考え、行動するのか、本書を手にして、ぜひ考えてみてください。(及川)

### ○新井一二三『台湾物語 「麗しの島」の過去・現在・未来』(筑摩書房)【開架】

台湾の魅力は、ショーロンポーやタピオカだけではありません。歴史、各都市の文化、先住民族、言語、映画、建築、そして日本との関係など、台湾について幅広く理解することができる一冊です。台湾に興味

がある人、これから台湾へ旅行や留学に行きたいと考えている人におすすめです。(及川)

**○野嶋剛『認識・TAIWAN・電影 映画で知る台湾』(明石書店)【中国言語・開架】**

映画を通して台湾を知るためのガイドブックです。台湾の社会を映し出す重要な映画について、作品の背景や関連情報が丁寧に解説され、監督や俳優のインタビューも掲載されています。実際に映画を見てから読み返すと、さらに理解を深めることができると思います。(及川)

**○榎本泰子『上海 多国籍都市の百年』(中公新書 2030)【中国言語・開架新書】**

21世紀の中国を象徴する大都市となった上海。広い中国の数ある都市の中で、なぜ上海だけが特別に発展したのでしょうか？ それには深いわけがあるのです……。租界が存在した時代のあらましとこの街独自の魅力を、そこに暮らした多国籍の人々の視線を通して書いてみました。(自薦ですみません。榎本)

**○春名徹『北京——都市の記憶』(岩波新書 新赤版 1126)【中国言語・開架新書】**

元・明・清三代の都として発展した北京には、長い歴史と伝統につながる遺跡が今もたくさん残っています。本書は、著者が街を歩きながら、一つひとつの場所に即した歴史を紹介するというスタイルを取っており、現在とのつながりをわかりやすく語っています。写真や図も豊富なので、きっと行ってみたいくなることでしょう。(榎本)

**今、日中関係を考える** .....

**○中島京子『のろのろ歩け』(文春文庫 な-68-2)【中国言語】**

三つの短篇小说「天燈幸福」「北京の春の白い服」「時間の向こうの一週間」を収録しています。日本の若い女性が、それぞれ旅行、仕事、夫の転勤のため、台湾、北京、上海を訪れる話です。現地の人と触れ合い、理解を深める過程がリアルに描かれています。タイトルは、中国人が別れぎわに使う挨拶言葉「慢慢走」を直訳したものです。(飯塚)

**○井上純一『中国嫁日記』 1～7 (KADOKAWA)【中国言語】**

中国人女性と結婚した日本人漫画家の日常を描いた漫画です。日本と中国の生活習慣の違いなどが主なネタになっていますが、中国に興味がなくとも普通に面白く読めるし、中国に興味があればタメにもなります。もともとブログ上で発表されたものなので(継続中)、ウェブでも読めます。書籍版には書き下ろしコンテンツも収録されているのが売りです。(材木谷)

**○城戸久枝『あの戦争から遠く離れて 私につながる歴史をたどる旅』(新潮文庫/き-46-0)【開架文庫】**

著者の父は残留孤児として辛酸をなめ、文化大革命のさなか奇跡的に帰国を果たしました。日本で生まれた著者は中国語のうまい父に違和感をおぼえ、「中国」に屈折した思いを抱いて育ちました。やがて著者は中国語を学び、父の歩んだ道のりを十年かけてたどることになります。残留孤児問題の重みと、歴史を語りつぐことの意味について考えさせられる一冊です。(榎本)

### ○劉文兵『中国 10 億人の日本映画熱愛史』（集英社新書 0356-F）【中国言語・開架新書】

1970 年代末から、日本の映画やテレビドラマが中国で一大ブームを巻き起こします。その後は日本のテレビドラマやアニメーションも、中国の人々の日本観に大きな影響を与えました。本書は、中国における日本文化受容の歴史を映画やテレビドラマを題材にして検証しています。（飯塚）

### ○山口淑子・藤原作弥『李香蘭・私の半生』（新潮文庫 や-36-1）【中国言語・開架文庫】

日中戦争中の満州から美貌の映画女優としてデビューした李香蘭。実は彼女は、中国語のうまい日本人「山口淑子」だった……。本当にあった話とは信じられないほどの波乱の人生。日中の不幸な歴史についても考えさせてくれます。（榎本）

### ○戸部良一『日本陸軍と中国——「支那通」にみる夢と蹉跌』（講談社選書メチエ 173）【中国言語・開架】

昔、日本には「陸軍」というものがあり、そこには「支那通」と呼ばれるひとたちがいました。この本は、ある代表的「支那通」を中心に、昔の日本人の中国観を明らかにします。今のわたしたちがどんな願望から中国を見ているのか、考えさせられます。（材木谷）

### ○中島恵『日本の「中国人」社会』（日経プレミアシリーズ 393）【開架】

「中国人」に対する日本人の先入観や誤解を打ち破る、優れた著作を発表してきた著者が、川口市などに代表される在日中国人コミュニティを取材しました。一括りの「中国人」ではなく、一人ひとりの人間が日本に住み着く理由を知ること、私たち受け入れる側の意識も変わっていくでしょう。（榎本）

### ○袁静『日本人は知らない中国セレブ消費』（日経プレミアシリーズ 365）【開架】

タイトルに言う「中国セレブ」とは、中間層よりもう少しお金がある「プチ富裕層」のことです。著者は訪日旅行客関連のビジネスを手がけており、日本のインバウンド業界に対してさまざまな意見を述べています。そこには上海人である自身の生活体験が色濃く反映されており、日中比較文化論としても興味深い本になっています。今どきの中国人のものの考え方を知りたい人におすすめです。（榎本）

## 欧米と中国

---

### ○入江昭『【増補】米中関係のイメージ』（平凡社ライブラリー448）【中国言語・開架】

ある外交官いわく、「日本にとって一番大切なのは日米関係である。日米関係とはすなわち日中関係である」。19 世紀後半から現在に至る世界史の中で、アメリカが中国に向ける視線は、常に日本への視線と連動していました。米中関係を理解しなければ、日本は中国とも、アメリカとも向き合うことはできません。長くアメリカの大学で教えた著名な学者の論述は、平明で説得力があります。（榎本）

### ○エイミ・タン（小沢瑞穂訳）『ジョイ・ラック・クラブ』（ヴィレッジブックス、角川文庫 タ-1-1）【中国言語・開架文庫】

中国からアメリカに移住した四人の女性とその娘たちの物語です。中国で暮らした母親たちの過去とアメリカで成人した娘たちの現在が交互に描かれます。東西文明の衝突、中国系アメリカ人のアイデンティティー、母と娘の絆などの問題を考える契機となるでしょう。映画もおすすめです。（飯塚）

**○カズオ・イシグロ（入江真佐子訳）『わたしたちが孤児だったころ』（早川書房、ハヤカワ epi 文庫 34）【中国言語・開架】**

20世紀初頭の上海租界で育ったイギリス人少年は、両親が失踪したため孤児となります。探偵となって両親を捜す主人公の前に立ちはだかるマフィアの影、そして日中戦争。戦場で幼なじみの日本人と再会したもの……。ノーベル文学賞を受賞した日系イギリス人作家が、イギリス人の故郷探し・親探しの物語を、上海を舞台に描く異色サスペンス。（榎本）

**○ダイ・シージェ（戴思傑）著（新島進訳）『バルザックと小さな中国のお針子』（早川書房）【中国言語・開架】**

文化大革命の時代、学業半ばで農村に送られ、肉体労働に明け暮れる主人公の若者二人。彼らの秘密の楽しみは、禁じられたフランス文学の翻訳を読むことでした。文盲の村娘は次第に彼らに感化され、都会の生活を夢見るようになります。さて三人の恋の顛末は……。中国人作家が自らの体験を踏まえてフランス語で書いた小説。映画（邦題『小さな中国のお針子』）もステキです。（榎本）

**○ケン・リュウ（古沢嘉通訳）『紙の動物園』（早川書房、ハヤカワ文庫 SF2121）【中国言語】**

在米中国人作家による SF・ファンタジー小説集。表題作は、アメリカ人の父と中国人の母を持つ少年が主人公です。英語がうまく話せない母さんが、幼いぼくに作ってくれた折り紙の虎。母さんとの葛藤と別離を経て、大人になったぼくが虎に再会した時、母さんの過去が初めて明らかになる……。読書が苦手なあなたも、だまされたと思ってぜひ一度読んでみてください。心の中に新しい世界が開くのを感じるでしょう。（榎本）